

帝政期ロシア企業家の行動様式

ーリャブシーンスキー家の事例ー

富岡庄一

1 はじめに

ソ連時代、リャブシーンスキーの名は、「人民の敵」とみなされていた⁽¹⁾。このような見方の背景には、リャブシーンスキー家が、帝政期ロシアの代表的な企業家（従って搾取者）一族のひとつであったという事情がある。加えて、帝政期におけるリャブシーンスキー家最後の代表者パーヴェル・パヴローヴィチ・リャブシーンスキーは、「モスクワ資本改革派」⁽²⁾のリーダーとして、自由主義的な改革を要求する運動の先頭に立ったという経緯もある。J.L.ウエストによれば、パーヴェル・パヴローヴィチの思想・行動は、ロシアと資本主義とを和解させようとした最初の試み、民主主義的な近代化へのロシア的な道を示そうとした先駆的な試み（但し、失敗した試み）であった⁽³⁾。

筆者は、これまで、帝政期ロシア企業家の行動様式について、企業家の本領である実業家としての側面に主として焦点を当てて、考察してきた⁽⁴⁾。それは、従来のロシア企業家史研究に窺われた傾向、つまり一つはソ連期にみられた、企業家を「搾取者」や「人民の敵」と一括する傾向に対する批判であり、もう一つは、従来の欧米での研究にみられた傾向、つまり自由主義的政治思想に裏付けられ、積極的な反専制の政治行動に立ち上がる存在としてのブルジョアジー（欧米で支配的だったとされるブルジョアジー像）を措定し、そのようなブルジョアジー像を帝政期ロシアの企業家の中に探し求めようとする傾向に対する批判を含意している。本稿も、筆者によるこれまでの一連の研究の一環に位置付けられるものである。

本稿では、特にリャブシーンスキー家に焦点を当てて、政治活動ではなく、企業家の本領である実業家としての活動を中心に考察する。中心となる史料は、『ペー・エム・リャブシーンスキー親子製造会社社史』⁽⁵⁾である。近年、ロシアでは、市場経済化の動きを背景に、歴史的先例として、

帝政時代の企業家に関する研究が相次いで公表されている。それらの諸研究も、本稿で利用している。それら諸研究においても、上記『社史』は、重要な史料として、多用されている。

2 創業者

リャブシーンスキー家の祖先は、カルーガ県ポロフスキー郡の、パフヌチエフスキー修道院（Пахнутьевский монастырь）を中心としたレブシーンスキー村（Ребушинская слобода）の住民だった⁽⁶⁾。実業家リャブシーンスキー家の創業者はミハイール・ヤーコヴレヴィチ（以下ミハイールと表記）とされる⁽⁷⁾。彼は、レブシーンスキー村の住民ヤーコフ・デニーソフの四男（1786年生まれ）だった⁽⁸⁾。ヤーコフ・デニーソフの父親デニス・コンドラーチエフは、パフヌチエフスキー修道院で働いていたが、分与地を入手して、修道院領農民となる（1786年に国有地農民に編入される）。しかし、わずかの分与地では生計を維持できず、ヤーコフ・デニーソフは、修道院からの時折の注文による木彫の仕事を補助的に続けざるを得なかった。ヤーコフ・デニーソフの妻（ミハイール・ヤーコヴレヴィチの母親）も、村人が作った靴下を仕入れて、近隣の町（ポロフスク）で販売し、家計を助けた。ヤーコフ・デニーソフの長男ヴァシーリイ・ヤーコヴレヴィチと次男イヴァーン・ヤーコヴレヴィチは父の仕事を手伝ったが、三男アルテミー・ヤーコヴレヴィチ（以下アルテミーと表記）と四男ミハイールは商いの修行に出された（1798年）⁽⁹⁾。

アルテミーとミハイールは、1802年に、独立して、モスクワの第3ギルド商人になり、「麻織物屋街」（Холщевый ряд Гостинного Двора）で、商売を始めた⁽¹⁰⁾。1810年には、アルテミーは古着を商い、ミハイールは麻織物を商っ

ていた⁽¹¹⁾。しかし、ナポレオンによるモスクワ侵攻が生じる。既に結婚していたミハイールは、家族と共に、トヴェリ県のキームルイ村に疎開した。そこで、妻方の事業である皮革業（履物の取引）に従事したが、うまくゆかなかった。1814年に、モスクワに戻る。しかし、ギルド税（гильдейский налог）を支払えず、都市細民（мещанство）身分になった⁽¹²⁾。ミハイールは、商家ソロコヴァーノフに雇われて働いた⁽¹³⁾。

ミハイールは、1824年、ようやく、第3ギルド商人に復帰して、独立することが出来た。但し、「麻織物屋街」の店舗（лавка）を、かつての主人ソロコヴァーノフ家から借りての営業だった。ソロコヴァーノフ家の支援が大きかったと言われる。ミハイールがその店舗を買い取ったのは、1844年のことだった。ミハイールは、他からも、店舗を買い足していった⁽¹⁴⁾。当初、麻織物を商ったが、毛織物や綿織物の商いに徐々に移り、1850年代には、多くの種類の毛織物・綿織物が販売された⁽¹⁵⁾。

ミハイールは、繊維製品を商うだけでなく、製造にも手を広げていく。1846年、モスクワで、リャブシーンスキー家最初の織物工場を始めた。手織機140台、労働者数185人だった。1856年には、ジャガード織機50台、労働者数356人となる。毛織物や混紡毛織物が製造された。⁽¹⁶⁾

ミハイールは、息子達パーヴェル・ミハイロヴィチ（以下パーヴェルと表記）とヴァシーレイ・ミハイロヴィチ（以下ヴァシーレイと表記）とが父親の仕事を手伝うようになると、第2、第3の工場を経営するようになる。第2の織物工場は、1849年に建設され、カルーガ県メドゥィンスキー郡ナソノヴォ村に位置した。1857年の概要は、織機600台、労働者数650人、年間生産額15万ルーブリであった。主な製品は混紡毛織物だった。⁽¹⁷⁾

第3の工場は、1854年に建設され、カルーガ県マロヤロスラフスキー郡チュリコヴォ村に位置した。蒸気機関（45馬力）で動く織機200台が稼働した。蒸気機関はイギリス（マンチェスター）から取り寄せられた。織布工場は2階建ての石造建築で、漂白・染色工場も2階建て（1階部分は石造、2階は木造）だった。建物と機械類との価額は12万ルーブリ近くになった。専用の煉瓦製造工場があり、学校も併設された。各種の綿織物・毛

織物を製造した。製品は、小売だけでなく卸売もされ、ミハイールは、西部辺境地域のユダヤ人達とも広範に取引したと言われる。⁽¹⁸⁾

ミハイールの家庭生活に目を向けてみよう。彼は、1811年に結婚した⁽¹⁹⁾。妻エフヒィミーの父親は、シェヴリノ村の農民出身で、皮革業を手広く営んでいた。自分の工場を持ち、モスクワでも取引をしていた。当初は第3ギルド商人だったが、1833年以降は第1ギルド商人になる⁽²⁰⁾。ミハイールとエフヒィミーの間には、3人の息子と2人の娘がいた。長男イヴァーン（1818年生まれ）、次男パーヴェル（1820年生まれ）、三男ヴァシーレイ（1826年生まれ）、長女ペラゲーヤ（1815年生まれ）、次女アンナ（1824年生まれ）である。ミハイールは、子供達に対して、家父長主義的に、厳しく接した。妻に対しては、家庭内の事柄だけでなく、事業に関しても、深い信頼を寄せた。子供達に対するミハイールの教育方針は、学校教育や書物による教育を重視せず、最良の教育は生活それ自体の中にあるというものだった。長男のイヴァーンは、16歳になると、父親から店舗や商品を借り、利益の中から借り賃や生活費を父親に支払うというかたちで、独立した商売をさせられた⁽²¹⁾。イヴァーンは、やがて、モスクワで染色工場（労働者数40人、年間生産額5千ルーブリ）を経営するなど、綿製品を扱って、独自の事業に成功した。1876年に死去した時、遺産15万ルーブリ余りを遺した⁽²²⁾。長女ペラゲーヤは、1832年に、商人の息子エフセーイ・アレクセエヴィチ・カプーストキンと結婚する。彼等の中の長男や孫達がリャブシーンスキー家の事業の中で働くなど、リャブシーンスキー家とカプーストキン家との親戚関係は長く続くことになる。⁽²³⁾

ところで、「リャブシーンスキー」という名前の由来である。ミハイールは、1820年に、出身村（レブシーンスキー村）の名前をとって、「レブシーンスキー」と名乗るようになる。「レブシーンスキー」はやがて「リャブシーンスキー」に変わり、「リャブシーンスキー」の名前は1850年代には定着していた。但し、ミハイールは、終生、「レブシーンスキー」とサインしたと言われる。⁽²⁴⁾

「レブシーンスキー」と名乗るようになったことは、ミハイールの古儀式派への改宗と関係していたと言われる。ロシアでは、一般に、ナポレオ

ン戦争による荒廃の中で、精神的な救済を求めて、古儀式派への改宗が広くみられた。モスクワの古儀式派信徒の数が、18世紀末の2万人から、1825年には6万8千人に増えた。当時栄えた古儀式派の拠点の一つがロゴジスコエ墓地の教会だった。ミハイールは、そこの司祭と懇意だった。ミハイールの故郷レブシーンスキー村は、修道院を中心とした村で、古儀式派の著名人の墓もあった。彼は、幼少の頃から、宗教的雰囲気の中で過ごした。彼の妻の父親も信心深かった。ナポレオンによるモスクワ侵攻以後零落していたミハイールは、1818年から1820年の間に、古儀式派（ポポーフシチナ派）に改宗したとされる。⁽²⁵⁾

ミハイールは1858年に死去する。遺産は200万ルーブリ（アッシグナツィアルーブリ）にのぼった。彼が創業した事業は、彼の遺言によって、2人の息子パーヴェルとヴァシーリイとが共同で受け継ぐことになった。⁽²⁶⁾

【ペー・エム・リャブシーンスキー親子製造会社社史】の表現によれば、ミハイールの人生目標は権力、名誉、金銭それ自体ではなく、資産を自分自身や家族のためでなく、事業の拡張のために使ったとされる⁽²⁷⁾。

3 第2世代

パーヴェル（フルネームはパーヴェル・ミハイロヴィチ・リャブシーンスキー）は1820年生まれ、ヴァシーリイ（フルネームはヴァシーリイ・ミハイロヴィチ・リャブシーンスキー）は1826年生まれであった。彼等は、14・15歳の頃から、父親ミハイールの厳格な監督の下で見習いとして働いた。パーヴェルは快活、らいらくで、愛想が良かったが、ヴァシーリイは人付き合いが悪かったと言われる⁽²⁸⁾。パーヴェルは、父親が重点を

置いていた繊維製品の商取引だけでは満足せず、製造業（紡績業、織物業）への進出を積極的に推進し、前記の3つの工場の整備に尽力した。彼は、伯父アルターミイが経営していた織物工場で生産技術を学び、父親にとってかけがえのない協力者になった⁽²⁹⁾。父親の事業を共同で受け継いだ2人は、「パーヴェルとヴァシーリイ・リャブシーンスキー兄弟商会（Торговый дом Павел и Василий братья Рябушинские）」を、1862年に、設立した⁽³⁰⁾。2人は、モスクワの事務所で、朝10時から夕方6時まで執務したと言われる⁽³¹⁾。商会は、1860年代、綿花危機に伴う綿工業の停滞期にも、発展を続けた⁽³²⁾。

パーヴェルは、1869年、商人シーロフが経営する紡績工場（場所は、トヴェーリ県ヴィシネヴォロツキー郡ザヴォロフ村）を、26万8千ルーブリで購入する。工場は、ヴィシニー・ヴォロチョーク市近郊で、ニコラエフスク鉄道のヴィシニー・ヴォロチョーク駅の近くにあり、又河沿いにもあって、輸送上の立地条件が良かった。更に、工場近辺は地価が安く、工場用燃料としての木材を入手するための森林を購入する上でも好適だった。⁽³³⁾ 以後、「パーヴェルとヴァシーリイ・リャブシーンスキー兄弟商会」の生産拠点は、この工場に集中していくことになる。つまり、前記の諸工場の内、第2の工場（カルーガ県メドゥィンスキー郡ナソノヴォ村）は1870年に閉鎖され、最初のモスクワの工場は1872年に売却され、第3の工場（カルーガ県マロヤロスラフスキー郡チュリコヴォ村）は1874年の火災以後殆ど操業を停止した。⁽³⁴⁾

ヴィシネヴォロツキー工場（又はザヴォロフスキー工場）の紡績部門（工場）における紡錘数は以下のように推移する⁽³⁵⁾。

(紡錘数)	ミュール紡績機	リング紡績機	合計
1870年	30592		30592
1875年	32356		32356
1880年	32366		32366
1885年	23340	6800	30140
1890年	23340	9920	33260
1895年	23340	9920	33260
1900年	47340	22576	69916
1905年	41728	24000	65728
1910年	39968	29056	69024
1913年			94872

当初は、3万錘程度で、当時のロシア平均の1工場当たり紡錘数4万2千錘と比べて、大規模ではなかった⁽³⁶⁾。しかし、20世紀に入って、紡錘数が急増する。特にリング紡績機の増加が顕著であるのは、ロシア全体の動向と一致している⁽³⁷⁾。紡績部門（工場）の労働者数は、1869年389人、1893年807人、1900年1015人、1905年980人、1910

年1445人だった⁽³⁸⁾。ヴィシネヴォロツキー工場は、1880年と1900年に火災に遭遇する。紡錘数が1880年から1885年にかけてと1900年から1905年にかけて減少し、労働者数が1900年から1905年にかけて減少しているのは、火災の影響とも考えられる。しかし、綿花の消費量は次の如くであり⁽³⁹⁾

(ブード)	1890年	1895年	1899年	1905年	1910年
アメリカ産	34550	49927	51082	29634	23091
エジプト産	5376	14177	14106	3471	9783
東インド産	33			7948	
中央アジア産	35920	36539	42303	92258	196099
カフカース産	3339	555	5542		
ペルシア産	84	2097	2384	579	
合計	79303	103497	115419	133890	229211

綿糸の年間生産量は次の如くである⁽⁴⁰⁾。

(ブード)	
1870年	41600
1875年	46749
1890年	72174
1895年	92878
1899年	109837
1905年	125487
1910年	204886

これらの数値の推移は、必ずしも、火災の影響を感じさせない。1880年の火災も、又1900年の火災においても、直ちに工場の再建がなされ、最新の外国製機械が装備された⁽⁴¹⁾。この結果とも考えられる。なお、ヴィシネヴォロツキー工場の消費綿花の内、中央アジア（ロシア領）産が20世紀

に入って急増しているのは、ロシア全体の動向と合致している⁽⁴²⁾。

ヴィシネヴォロツキー工場には、織布部門（工場）も建設される。大きな2階建ての建物の建設が1873年から始まり、操業開始は1875年だった。織機台数は以下のように推移する⁽⁴³⁾。

(織機台数)	
1875年	316
1880年	713
1885年	741
1890年	747
1895年	747
1900年	1196
1905年	959
1910年	1221
1912年	1985

織布部門（工場）の労働者数は、19世紀末319人、1900年1034人、1905年680人、1910年1363人だった⁽⁴⁴⁾。

1875年には、漂白・染色部門（工場）も建設さ

れた。ロシア製の機械55台、外国製の機械80台が稼働した⁽⁴⁵⁾。この部門（工場）の労働者数は、1876年147人、1890年185人、1910年338人だった⁽⁴⁶⁾。

ヴィシネヴォロツキー工場の製品としては、キヤラコ、ブリリアンチン、綿サテン、綿モスリン等々、極めて多様な綿織物が製造された⁽⁴⁷⁾。

又、ヴィシネヴォロツキー工場の敷地内には、各種の福利厚生施設が整備されていった。最初の労働者用住宅（60家族用、石造建築）が1877年に、2番目の労働者用住宅（80家族用）が1884年に建設された。労働者用住宅は、20世紀に入ってから、3階建のもの（130家族用）が建設される⁽⁴⁸⁾。工場付属の労働者用住宅の家賃は月額40カペイカ（窓1つにつき）だった。他に、労働者の中には、自分の持ち家に住む者、借家に住む者等々もいた。⁽⁴⁹⁾

次に医療施設である。既に1871年に木造の診療所（10床）が建設されたが、1883年には石造の病院が建設され、1896年に病院の拡張がなされ、更に1907年に病院が新設され、1911年には入院棟も付設される等、医療設備の整備が進んで、第1次大戦直前の時期には、外来診療棟以外に、入院棟（30床）、一般隔離病棟（20床）、コレラ患者隔離病棟（20床）、産院（12床）が存在した。外来患者数（延べ数）は、1906年17343人、1908年26044人、1911年30756人だった。会社が医療施設維持のために支出した費用は、例えば1911/12年の数値で2万2千ルーブリ余りになった。他に、養老院（50人収容）が1900年に、託児所（100人収容）が1904年に建設された。⁽⁵⁰⁾

学校も建設される。1884年に初等教育（3年制）の学校が建設され、1892年に学校用の新しい建物が建設されて生徒定員が150人になり、1904年に生徒定員が220人に増え、1911年には更に新校舎が建設されて生徒定員が400人になった。カリキ

ユラムは、1週間に、ロシア語54時間、算数25時間、神学9時間等であった。1897年から1911年までの15年間に、入学者数は983人、卒業者数は255人だった。工場付属学校は1911年に国民教育省の管轄下に入る。1911年には、より専門性の高い教育を施すために、新しい建物が建設され、新しい課程（織物、指物、鍛冶）が導入された。5年制で、生徒定員400人だった。会社が学校のために支出した費用は、例えば1911/12年の数値で1万8千ルーブリ余りであった。⁽⁵¹⁾

1885年、弟ヴァシーリイが死去する⁽⁵²⁾。パーヴェルは、事業をより強固にするために、「パーヴェルとヴァシーリイ・リャブシーンスキー兄弟商会」を改組する。新たな「ペー・エム・リャブシーンスキー親子製造会社（Товарищество мануфактур П.М.Рябушинского с сыновьями）」は、「株式会社」（товарищество на паях）形態⁽⁵³⁾で、会社の定款が勅許を受けたのが1887年だった。この会社は、1912年まで続くことになる。資本金は200万ルーブリで、1000の株式（пай）に分割された（株式の額面価格は2000ルーブリ）。その内、787株をパーヴェルが所有し、200株を彼の妻が所有した。残りの13株は、リャブシーンスキー家以外の者（5名）が取得したが、後にリャブシーンスキー族の人々に売却された。パーヴェルが、代表取締役（директор распорядитель）だった。⁽⁵⁴⁾ 1894年には、資本金400万ルーブリへの増資が認められ、新たに1000株が発行されたが、それらは総てパーヴェルが取得した⁽⁵⁵⁾。

新会社への改組時の資産は以下の如くだった

土地	3253デシャチナ	34868ルーブリ
工場の建築物と機械		50万ルーブリ
各種機械		448164ルーブリ
綿花（在庫と加工中のもの）		63万ルーブリ
加工した綿花及び糸		128000ルーブリ
諸製品（在庫、工場の中にあるもの、モスクワにあるもの）		24万ルーブリ
燃料	61494ルーブリ	26カペイカ
建築材料		31023ルーブリ
その他	33105ルーブリ	49カペイカ
現金		30万ルーブリ

前述のように、リャブシーンスキー家の事業で、製造業（綿工業）の中心となるヴィシネヴォロツ

キー工場（又はザヴォロフスキー工場）を購入する上でイニシアチブをとったのがパーヴェルであ

る。ヴァシーリイは反対だった。ヴァシーリイは、製造部門の拡張や土地の購入には懐疑的で、資産の有効な運用先として、有価証券への投資と手形の割引を重視していた。そこで、パーヴェルは、ヴィシネヴォロツキー工場を購入する際、「パーヴェルとヴァシーリイ・リャブシーンスキー兄弟商会」の資金ではなく、彼の個人資産を投じることになった。⁽⁵⁷⁾パーヴェルは、優れて工業企業経営者だった。彼は、若い頃より、製造業の技術に強い関心を示し、製品の品質向上に努めた。工場の製品は、既に1865年にはモスクワの工業博覧会で銀メダルを、1870年にはサント・ペテルブルクの全ロシア博覧会で金メダルを獲得している。⁽⁵⁸⁾又新技術の導入にも熱心で、1898年には、紡績部門と織布部門に電灯を導入している⁽⁵⁹⁾。

(ルーブリ)

1867年	726846.19
1870年	806988.20
1875年	1537185.55
1880年	908779.11
1885年	3619699.84

1880年代の「商会」の利益構成は次のとおりである⁽⁶⁴⁾。

(ルーブリ)	商品の製造・取引からの利益	有価証券への投資からの利益	手形割引からの利益
1882年	295800	103740	126621
1883年	315379	153167	205902
1884年	253979	80360	206684
1885年	169869		269001
1887年	190486	60245	158448

既に1880年代に、「商会」全体としては、製造業からよりも、金融業（有価証券への投資や手形の割引）から、より多くの利益を挙げていることになる。金融業への一層の進出は、第3世代の下で果たされる。

ところで、パーヴェルとヴァシーリイは、1858年まで都市細民（мещанство）身分であった。ニコライ1世が、古儀式派から正教への改宗を強制する策として、1855年1月1日以降古儀式派の信徒が商人に登録する権利を奪った。パーヴェルとヴァシーリイは、改宗して商人身分になるのではなく、モスクワの都市細民になる道を選んだのである。1858年（父親ミハイールが死去した年）になって、ようやく、当座の処置としてモスクワの

又、パーヴェルは、工場用燃料の木材を確保するために、25900デシャチナ（82万ルーブリ）の森林を購入した⁽⁶⁰⁾。晩年には、建築用材を製造するために、製材工場も設立するに至る⁽⁶¹⁾。パーヴェルは、父親ミハイールと同様、利益ではなく事業そのものに主たる関心を有していたと言われる⁽⁶²⁾。

パーヴェルは、製造業（綿工業）への進出にのみ熱心だったわけではない。ヴァシーリイが重視した有価証券への投資や手形の割引にも、意を払った。「パーヴェルとヴァシーリイ・リャブシーンスキー兄弟商会」は、既に初期の頃から、手形の割引業務を行っていた。割引金額は以下の如くである⁽⁶³⁾。

第2ギルド商人に認められ、1863年以降は第1ギルド商人となる。⁽⁶⁵⁾そして、パーヴェルとヴァシーリイは、1884年に、世襲名誉市民（потомственный почетный гражданин）⁽⁶⁶⁾の称号を得る⁽⁶⁷⁾。従来、古儀式派信徒は世襲の称号を受けられなかったが、アレクサンドル3世の勅令で、1884年に、古儀式派信徒も世襲の称号を受けられるようになったのである⁽⁶⁸⁾。

アレクサンドル2世の治世が始まる（1855年）と、ロシア社会は活性化し、商人の中で進歩的な人々は、公的義務に対しても積極的に協力するようになった。ヴァシーリイは、社会的関心が薄く、公職にほとんど就かなかった。しかし、パーヴェルは、古儀式派の信仰に熱心だったが、その伝統

には必ずしもこだわらず、西欧式の服装をし（保守的な商人達はロシア伝統の服装をしていた）、芸術家達とも幅広く交際し⁽⁶⁹⁾、多くの公職に就いた。パーヴェルは、既に1860年にモスクワ市会の運営委員の一人に選出され（任期3年）、1870年から76年にかけてモスクワ取引所委員会のメンバーに選出され、1871年と72年に国立銀行モスクワ支店割引・貸付委員会の一員になる等々、殆ど切れ目なく公職に就いた⁽⁷⁰⁾。

又、パーヴェルは、慈善活動を、経済力のある者にとって不可欠の義務であると考えていた。1891年の飢饉の時に無料の食事提供所を自宅に併設し、1895年に更に救護所も増設し、遺言でこれら施設の維持費を提供した。都市細民のための学校設立に向けて資金集めも試みた⁽⁷¹⁾。

パーヴェルの家庭生活に目を向けてみよう。パーヴェルの最初の結婚は、23歳の時（1843年）、ゴゴジスキー墓地教会の著名な司祭の孫娘アーンナとであったが、1859年に離婚する。6人の娘が残された。再婚は、1870年、サンクト・ペテルブルクの著名な穀物商人ステパーン・タラーソヴィチ・オフシャーンニコフの娘アレクサンドラとであった。二人の間には、16人の子供が生まれることになる。その内息子は、長男パーヴェル（父親と同じ名前なので、以下パーヴェル・パヴローヴィチと父称も付けて表記する）（1871年生まれ）、セルゲーイ（1872年生まれ）、ウラジーミル（1873年生まれ）、ステパーン（1874年生まれ）、ボリース（1876年生まれだが1883年に死亡）、ニコラーイ（1877年生まれ）、ミハイール（1880年生まれ）、ドミートリー（1882年生まれ）、フョードル（1885年生まれ）だった。⁽⁷²⁾

子供達の教育は、妻アレクサンドラの管轄下で行われた。息子達は、実践学校（Академия Практических Наук）の予科又はヴォスクレセンスク実科学校（реальное училище Воскресенского）で実務的な教育を受け、娘達はギムナジアで学んだ。子供達の多くは、熱心に勉強し、金メダルを取って学校を終えたという。長男パーヴェル・パヴローヴィチは特に成績優秀で、高等数学にも夢中になり、英語・ドイツ語・フランス語に堪能だったと言われる。外国語は、家庭教師によって教えられた。父親パーヴェルの方針で、子供達は、勉学と共に、工場に送られて、

生産現場の雰囲気を経験させられた。小さい頃から、家業に関心を持たせるためであった。息子達は、学業を終えると、仕事を体得するために、外国に行かされた。パーヴェル・パヴローヴィチはイギリスに行き、他の息子達はドイツに行った。⁽⁷³⁾

パーヴェルは、1899年、79歳で死去し、妻アレクサンドラは、1901年に死去する。パーヴェルの遺産は2千万ルーブリだった。⁽⁷⁴⁾

4 第3世代

リャブシーンスキー家としての事業活動に触れる前に、父親パーヴェルの息子達の行動（事業活動以外）を概観しておこう。長男パーヴェル・パヴローヴィチは、父親の事業を主として受け継いで活発な企業家活動を行うが、それ以外に、様々な社会活動、政治活動に積極的に従事した。パーヴェル・パヴローヴィチと言えば、従来、政治活動に焦点を当てられることが多かった⁽⁷⁵⁾。政党「進歩党」の設立に関わり、雑誌《Утро России》の発行を資金援助する等々。又、彼は、1900年以降モスクワ取引所委員会のメンバーになり、商工業代表者会議（Съезды представителей промышленности и торговли）、全ロシア商工業連合（Всероссийский союз торговли и промышленности）等々の創設・運営に関わり、第1次大戦中には戦時工業委員会で中心的な役割を果たした。更に、古儀式派の運動にも参加した。1917年の10月革命以後フランスに亡命し、その地で1924年に死去した。⁽⁷⁶⁾

3男ウラジーミルは、オクチャプリスト（10月党）の中央委員を務め、又イコンの収集家として名高かった。彼は、10月革命後、フランスに移住し、「イコン協会」（общество《Икона》）を設立して、ロシアのイコンを紹介した。⁽⁷⁷⁾

6男ニコラーイは、商工業への関心がなく、絵画にいそしみ、自己の資金で、文学・絵画雑誌《Золотое Руно》を発行した⁽⁷⁸⁾。

7男ミハイールは、事業意欲が強く、10月革命後亡命して、ロンドンの《Western Bank》の取締役（директор правления）になった。彼は又絵画の収集でも有名だった。⁽⁷⁹⁾

8男ドミートリーは、モスクワ大学理学部を卒

業し、「ロシア航空機の父」と呼ばれたH.E.ジュコーフスキーの協力を得て、航空力学研究所を設立した。彼は、10月革命後、フランスに移住してからも、研究活動を続け、フランス科学アカデミーの通信会員になる。⁽⁸⁰⁾

9男フョードルは、25歳（1910年）で若死にするが、生前、自己の資金を投じて、カムチャツカへの科学的調査団を組織し、遺産を、ロシア地理協会が後援するカムチャツカ天然資源探索に提供した⁽⁸¹⁾。

他に、次男セルゲイはロシアの古い芸術に関する大規模な博覧会を組織し、4男ステパンはアイコンの収集家として有名だった⁽⁸²⁾。

さて、リャブシンスキー家の事業活動全般を代表して引き継いだのが長男パーヴェル・パヴロヴィチであった。彼は、「ペー・エム・リャブ

シンスキー親子製造会社」の代表取締役（директор распорядитель）となる。そして彼を主として補佐したのが、次男セルゲイ、3男ウラジーミル、4男ステパン、7男ミハイール達だった。⁽⁸³⁾ 次男セルゲイと4男ステパンとは製造業部門を担当し、3男ウラジーミルと7男ミハイールとは金融業部門を担当した⁽⁸⁴⁾。

まず、製造業（綿工業）についてみてみよう。20世紀に入って、リャブシンスキー家の綿事業は、クノープ家の強力なライバルとなり、又モローゾフ家に次ぐ存在となつて、ロシアで最大のものの一つに成長する⁽⁸⁵⁾。

「ペー・エム・リャブシンスキー親子製造会社」の綿事業での販売額は次のように推移する⁽⁸⁶⁾。

(千ルーブリ)	綿織物等	綿糸等	合計
1878-83年	1269.5	281.3	1550.8
1883-88年	1071.2	102.6	1173.9
1888-93年	1225.5	270.0	1495.5
1893-98年	1317.4	574.2	1891.6
1898-1903年	1140.2	621.4	1761.6
1903-08年	2253.4	1822.4	4075.9
1908-12年	3746.0	2338.4	6084.4

1883-88年の数値が減少しているのは、ヴァシリー・ミハイロヴィチの死去によるものとされ、1898-1903の数値の減少は1900年の紡績工場・織布工場の火災によるものだった。いずれの数値も、20世紀になって急増している。既に掲げたように、紡錘数、織機台数、綿花消費量、綿糸生産量等々の数値も、20世紀に入って（特に第1次大戦直前期に）、急増する。第1次大戦開始時には、リャブシンスキー家の綿事業は、年間生産額800万ルーブリ、工場労働者数4500人になっていた⁽⁸⁷⁾。

20世紀になって、ヴィシネヴォロッスキー工場に、中央発電所が建設され、ニコラエフ鉄道から工場までの支線も建設される⁽⁸⁸⁾。1907年以降は、販売部門が強化され、各地（まずサンクト・ペテルブルク、次いでロストフ・ナ・ドヌー、オムスク、ハリコフ）に支店が開設された⁽⁸⁹⁾。更に、輸出市場の調査の為に、1909年に、バルカンやモンゴルに調査団を派遣した⁽⁹⁰⁾。

「ペー・エム・リャブシンスキー親子製造会

社(Товарищество мануфактур П.М.Рябушинского с сыновьями)」は、1912年に、名称を「ペー・エム・リャブシンスキー親子商工業会社(Торгово-промышленное товарищество П. М. Рябушинского с сыновьями)」と改めた。資本金は500万ルーブリとなる。⁽⁹¹⁾ 資本金500万ルーブリは、2500の株式(пай)に分割され、その95パーセントをリャブシンスキー兄弟が所有した。つまり、パーヴェル・パヴロヴィチ(491株)、セルゲイ(499株)、ウラジーミル(381株)、ステパン(415株)、ミハイール(319株)、ドミートリー(270株)であった。純益の半分は株式所有者への配当として配分され、残りは減価償却基金にまわされたという。⁽⁹²⁾

リャブシンスキー家の、製造業における事業活動は綿工業にとどまらなかった。まず林業である。第2世代のパーヴェル・ミハイロヴィチ・リャブシンスキーが、やがて中核となる綿工場ヴィシネヴォロッスキー工場（又はザヴォロフスキ

一工場)を購入するにあたって重視した要素の一つが、工場用燃料としての木材を入手するための森林を購入する上での便宜だった。森林の購入は、パーヴェルの死後も続けられ、会社が所有する森林面積は、1912年に41000デシャチナになり、

1916年には60000デシャチナになった⁽⁹³⁾。自工場用の燃料を確保するだけでなく、製材して販売するようになる。この動向は20世紀に入って顕著となる。⁽⁹⁴⁾

生産された木材は、第1次大戦直前期になると、

	製材機械数	木材加工機械数	労働者数	鋸挽丸太数	鋸挽板数
1897-00年	1	—	25	7665	62340
1901-04年	1	—	25	12080	88123
1905-08年	2	3	55	73614	567662
1909-12年	2	3	54	95613	609552

輸出されるまでになる。ちなみに、ロシア全体の木材(丸太、板材)輸出は、第1次大戦直前期に輸出総額の1割を占めるに至り、穀物に次ぐ輸出品目となる⁽⁹⁵⁾。

リャブシーンスキー家は、1916年に、ロシア北部(アルハンゲリスク)の最大の製材企業(товарищество Беломорских лесопильных заводов «Н. Русанов и сын»)を買収し、1917年には会社(общество «Русский Север»)を設立して、森林資源の開発や製紙業への進出に一層力を入れた⁽⁹⁶⁾。

リャブシーンスキー家の製紙業への進出は、既にВ.И.パスブルクが1889年に設立していた会社

(Товарищество Окуловских писчебумажных фабрик)に参入するという形を取った。リャブシーンスキー兄弟の内、ウラジーミルとステパーンが取締役会に入った。1906年から1911年にかけて、設備の近代化が進み、セルロース、木材パルプ、紙の生産が増加した。⁽⁹⁷⁾

又、印刷・出版業にも従事した。パーヴェル・パヴローヴィチは、ロシアで最新の設備を備えた印刷会社(Товарищество типографии П. П. Рябушинского)を経営し、雑誌(Утро России)の発行に関わった⁽⁹⁸⁾。印刷会社の概要は以下の如くであった⁽⁹⁹⁾。

他にも、ガラス製造業、石油産業、自動車工業

	労働者数	取引額(ルーブリ)
1909-1910年	47	56202
1910-1911年	120	181863
1911-1912年	149	209300

などにも進出している。ガラス製造業では、1911年に、既存のガラス工場を買収し、ドイツのシーメンスから最新の設備を導入して、ガラスの製造に従事した⁽¹⁰⁰⁾。石油産業では、第1次大戦中に、「ノーベル兄弟会社」の株を購入し、油田の開発に関心を示した。自動車工業では、セルゲーイとステパーンとが、1915年に、ロシア陸軍省と、貨物自動車の製造契約を結び、国庫の資金援助を得て、ロシアで最初の自動車工場を建設すべく、株式会社(Автомобильное московское общество)を設立した。自動車製造の特許は、イタリアのフィアットから得た。⁽¹⁰¹⁾

リャブシーンスキー家は、亜麻事業にも進出した。亜麻はロシアの伝統的な輸出品だったが、第1次大戦前夜でも、世界最大の亜麻生産国だった

ロシアが、西欧先進諸国で発達しつつあった亜麻工業に対する原料供給基地としての役割を果たしていた。当時、イギリスが輸入する亜麻の3/4はロシア産であった⁽¹⁰²⁾。ロシアからの亜麻輸出が外国企業の手の中にあっただ中で、リャブシーンスキー家は、С.Н.トレチャコフと協力して、亜麻輸出におけるロシアの自主権を確保しようとして、亜麻取引を行う会社(Русское льнопроизводственное акционерное общество、略してРАЛО)を1912年に設立した。当初の資本金は100万ルーブリで、その8割をリャブシーンスキー家が引き受けた。取締役会の議長(председатель)はС.Н.トレチャコフが、監査役会の議長はミハイール(フルネームはミハイール・パヴローヴィチ・リャブシーンスキー)が就

任した。更に、19400錘の紡績機と934台の織機を有する亜麻工場（Гаврило-Ямская мануфактура А. А. Локалова）も買収して、亜麻製品の製造に乗り出した。⁽¹⁰³⁾

さて、前述の如く、リャブシーンスキー家の事業全体としては、既に1880年代に、製造業からよりも、金融業（有価証券への投資や手形の割引）から、より多くの利益を挙げていた。20世紀に入って、その傾向は一層顕著となる⁽¹⁰⁴⁾。

リャブシーンスキー家が金融業に本格的に参入するのは、ハリコフ土地銀行を支配下に置くようになってからである。元来、ハリコフ土地銀行を設立（1871年）したのはA.K.アルチューフスキーであった。彼は、1867年にハリコフに現れ、1868年にはハリコフ商業銀行の設立に加わるなど、瞬く間に南部ロシアで第1級の企業家としての名声を博するようになった。彼は、ハリコフ商業銀行とハリコフ土地銀行とを、事実上完全に支配したと言われる。彼は、1895年に、ドネツ・ユリエフ製鉄会社の設立に参加するなど、事業の幅を広げていった。しかし、1900年恐慌の中で、彼の事業は暗転する。ハリコフ商業銀行とハリコフ土地銀行とは支払不能に陥り、ドネツ・ユリエフ製鉄会社は政府の管理も受けた。A.K.アルチューフスキーは、1901年5月7日、サンクト・ペテルブルクのワルシャワ駅で、列車に投身自殺する。⁽¹⁰⁵⁾ リャブシーンスキー家は、1880年代以来、ハリコフ

(千ルーブリ)

1902年	3020.0
1903年	33695.3
1904年	71777.2
1905年	313424.4
1906年	642866.8
1907年	660628.7
1908年	742347.2
1909年	915941.9
1910年	1197219.1
1911年	1423286.6

顕著である。なお、1909年に設けられるサンクト・ペテルブルク支店の取引額は1909年9413.2（千ルーブリ）、1910年346108.6、1911年496901.0と推移する。他にも、10余りの支店が、非黒土地帯（製造業地域、亜麻栽培地域）を中心に開設された。⁽¹⁰⁹⁾

土地銀行に投資していた。3男ウラジーミルと7男ミハイールとは、A.K.アルチューフスキーの自殺によって暴落したハリコフ土地銀行の株を買って占めて大株主になり、取締役会のメンバーになり、ウラジーミルは取締役会議長になる。ハリコフ土地銀行の取締役会には、長男パーヴェル・パヴローヴィチをはじめ、リャブシーンスキー家の親族も加わる。パーヴェル・パヴローヴィチは、ウラジーミルの跡を継いで1906年に取締役会議長になる。こうして、ハリコフ土地銀行の支配権がリャブシーンスキー家に移ることになる。ハリコフ土地銀行は、国立銀行の信用供与や大蔵省の救済策によって、1902年半ばには危機を脱した。⁽¹⁰⁶⁾

1902年、リャブシーンスキー家は、金融業務を担当する会社として、「リャブシーンスキー兄弟銀行（банкирский дом братьев Рябушинских）」を設立する。当初の資本金は105万ルーブリだったが、速やかに500万ルーブリに増やされた。出資をしたのが、パーヴェル・パヴローヴィチ、セルゲイ、ウラジーミル、ステパン、ミハイール、ドミートリー、フョードルの、リャブシーンスキー兄弟だった。経営の先頭に立ったのはウラジーミルとミハイールで、パーヴェル・パヴローヴィチも経営にも参画した。⁽¹⁰⁷⁾

モスクワ本店の取引額は以下のとおりである⁽¹⁰⁸⁾。

1905年、1906年の増加と、1909年以降の増加が

「リャブシーンスキー兄弟銀行」は、1912年に改組されて、株式商業銀行の「モスクワ銀行（Московский банк）」となる。ウラジーミルが取締役会議長、ミハイールが取締役の一人となる。パーヴェル・パヴローヴィチは、監査役会（совет）の長となった。⁽¹¹⁰⁾ 資本金は、当初

1000万ルーブリだったが、間もなく1500万ルーブリに増額され、第1次大戦前夜には2500万ルーブリになる⁽¹¹¹⁾。株(акция)の大部分はリャブシーンスキー兄弟(パーヴェル・パヴローヴィチ、ウラジーミル、ステパーン、ミハイール)が所有したが、П.А.モローゾフ、С.Н.トレチャコフ、А.И.コノヴァーロフ等々のモスクワの大資本家達も株を所有し、監査役会のメンバーとなった⁽¹¹²⁾。第1次大戦前夜ともなると、「モスクワ銀行」は、モスクワの諸銀行の中でも、指折りの大銀行の一つに成長する⁽¹¹³⁾。

5 おわりに

帝政期のロシアで、主たる商工業従事者(企業家)は都市住民、特に「商人」と呼ばれた人々であった。ロシアの伝統的な「商人」は、古風な風貌・衣装、家族や従業員に対する家父長主義的な態度、前近代的な営業習慣、宗教(特に古儀式派)の強い影響、教育一般に対する否定的な態度、公的義務からの逃避、官僚や地主貴族の面前での卑屈な態度、官僚に対する不信、そして皇帝に対する無条件の忠誠心等々の特徴を有したとされる。リャブシーンスキー家の場合も、そのような特徴の幾つかは垣間見られる。しかし、伝統的な相貌にそぐわない側面も多々見られる。ガブリンは、帝政期ロシアで成功した企業家一族に共通している諸点を次のようにまとめている。創業者に顕著な点は、農民出身、古儀式派への改宗(帰依)、着実な資本蓄積、禁欲的な生活態度、無教育、家族内での専制主義であり、第2世代に顕著な点は、無尽蔵といえるエネルギー、企業家的イニシアチブの発揮、資本の急速な増加であり、第3世代以降に顕著な点は、子弟に対する教育熱心、社会的・文化的活動への強い関心であると⁽¹¹⁴⁾。以前検討したモローゾフ家と同様、リャブシーンスキー家の場合も、同様の諸点がみられる。特に、リャブシーンスキー家は、綿工業にとどまらず、他の製造業、そして金融業と、手広く事業を展開し、モスクワ伝統の堅実な企業活動の枠を遙かに超えていた。勿論、パーヴェル・パヴローヴィチの政治活動も忘れてはならない。

[付記。本論文は、平成16年度～19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))の成果の一部である。]

注

- (1) Петров Ю. А. Династия Рябушинских. М., 1997. С. 5.
- (2) 高田和夫「近代ロシアにおける資本家の社会的地位—1905年のモスクワ資本改革派をめぐって—」(『スラヴ研究』、39、1992年)。
- (3) J. L. West and I.A.Petrov (ed.), Merchant Moscow, Images of Russia's Vanished Bourgeoisie (Princeton University Press, 1998), p. 170.
- (4) 富岡庄一「ロシア企業家史考」(北海道大学『経済学研究』、第48巻第3号、1999年)、富岡庄一「帝政期ロシア企業家の行動様式—モローゾフ家の事例—」(広島大学『経済論叢』、第26巻第3号、2003年)。
- (5) Торговое и промышленное дело Рябушинских. М., 1913.
- (6) Там же. С. 3.
- (7) ミハイール・ヤーコヴレヴィチ(Михаил Яковлевич)は、ミハイール・ヤーコヴレフ(Михаил Яковлев)と記されることもある。Петров Ю. А. Династия Рябушинских. С. 8.
- (8) Торговое и промышленное дело Рябушинских. С. 5.
- (9) Там же. С. 6, Гавлин М. Л. Российские Медичи. Портреты предпринимателей. М., 1996. С. 103-104.
- (10) Торговое и промышленное дело Рябушинских. Предисловие.
- (11) 1000 лет русского предпринимательства, Из истории купеческих родов. М., 1995. С. 146.
- (12) Гавлин М. Л. Российские Медичи. С. 104.
- (13) Торговое и промышленное дело Рябушинских. С. 17.
- (14) Там же. С. 18-23.
- (15) Петров Ю. А. Династия Рябушинских. С. 10.
- (16) Торговое и промышленное дело Рябушинских. С. 12, 24, Петров Ю. А. Династия Рябушинских. С. 10-11.
- (17) Торговое и промышленное дело Рябушинских. С. 34, Петров Ю. А. Династия Рябушинских. С. 11.
- (18) Торговое и промышленное дело Рябушинских. С. 25, 35-36, 107-108, Петров Ю. А. Династия Рябушинских. С. 11.
- (19) Гавлин М. Л. Российские Медичи. С. 104.
- (20) Торговое и промышленное дело Рябушинских. С. 7.
- (21) Там же. С. 12-13.
- (22) Там же. С. 21-22, Петров Ю. А. Династия Рябушинских. С. 9.

- (23) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 20.
- (24) Там же . С. 8-9, Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский // Россия на рубеже веков: исторические портреты., М., 1991. С. 113-114.
- (25) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 16, Хорькова Е.П. История предпринимательства и меценатства. М., 1998. С. 392, Ананьич Б.В. Банкирские дома в России 1860-1914. М., 1991. С. 111, Калинин В. Д. Из истории предпринимательства в России, Династии Прохоровых и Рябушинских. М., 1993. С. 65, Гавлин М.Л. Российские Медичи. С. 105-106.
- (26) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 26-27.
- (27) Там же . С. 12.
- (28) Там же . С. 31.
- (29) Гавлин М.Л. Российские Медичи. С. 109-110.
- (30) 正式の設立年は、モスクワ市会が設立を承認した1867年。Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 37.
- (31) Там же . С. 48.
- (32) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 14.
- (33) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 46, 109.
- (34) Гавлин М.Л. Российские Медичи. С. 116-117.
- (35) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 112.
- (36) Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 70.
- (37) 富岡庄一『ロシア経済史研究』(有斐閣、1998年)、278頁。
- (38) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 116.
- (39) Там же . С. 119.
- (40) Там же . С. 119.
- (41) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 18, 31.
- (42) 富岡庄一『ロシア経済史研究』、60頁。
- (43) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 111-112.
- (44) Там же . С. 118.
- (45) Там же . С. 111, 116.
- (46) Там же . С. 118.
- (47) Там же . С. 120-121.
- (48) Там же . С. 48, 78.
- (49) Там же . С. 118-119.
- (50) Там же . С. 141-143.
- (51) Там же . С. 145-149, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 85.
- (52) ヴァシーリイには妻子がいなかったと思われる。彼の遺産は、半分を兄のパーヴェルが相続し、残りの半分を亡き長兄イヴァーンの子供達が相続した。Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 49.
- (53) ロシアでは、1836年から、有限責任の株式会社の設立が法的に認められるようになる。ただ、ロシアの場合、西欧の株式会社と同様の会社形態（акционерное общество）で、株式（акция）の額面価格が比較的小さく、株主が不特定多数に及ぶものと、モスクワ地域で多くみられた会社形態（товарищество на паях 又は паевое товарищество）で、株式（пан）の額面価格が大きく、株主を家族や知人等ごく限られた人々に限定したものとがある。なお、前者は、Санкт・Петербург 或は南部をはじめとする新興工業地域で多くみられた。Хеллер К. Отечественное и иностранное предпринимательство в России 19- начала 20 века. // Отечественная история. No. 4, 1998. С. 63, J. L. West and I. A. Petrov ed., Merchant Moscow, pp. 31-33.
- (54) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 49-50, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 71, Петров Ю.А. Династия Рябушинских . р. 19, Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. М., 1998. С. 173.
- (55) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 112.
- (56) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 51.
- (57) Там же . С. 51-52.
- (58) Там же . С. 53, Гавлин М.Л. Российские Медичи . С. 117-118.
- (59) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 22.
- (60) Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. С. 173.
- (61) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 47, 54.
- (62) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 22.
- (63) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 51.
- (64) Там же . С. 52.
- (65) Там же . С. 32-33.
- (66) 著名な商人が、大卒者、一部の聖職者の子弟等と共に、名誉市民に認定された。名誉市民は、市政への奉仕義務から解放される等、ふつうの商人より経済的安定度は強化されたが、最も裕福な商人にのみ

- 開かれた地位だった。名誉市民は、一代限りと世襲とに別れていた。The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History, Vol. 21, p. 218..
- (67) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 48.
- (68) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 111.
- (69) Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С.114, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 71-72.
- (70) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 38-40, 1000 лет русского предпринимательства . С. 161-162.
- (71) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 40, 53 Гавлин М.Л. Российские Медици . С. 118.
- (72) Там же . С. 41-44.
- (73) Там же . С. 73, 1000 лет русского предпринимательства . С. 170, Петров Ю.А. Династия Рябушинских . р. 30, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 72.
- (74) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 55. Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С. 114.
- (75) 例えば、高田和夫「近代ロシアにおける資本家の社会的地位—1905年のモスクワ資本改革派をめぐって—」(『スラヴ研究』、39号、1992年)、富岡庄一「ロシア企業家史考」(『経済学研究 [北海道大学]』第48巻第3号、1999年)、59ページ。
- (76) Гавлин М.Л. Российские Медици . С. 119, Барышников М.Н. Деловой мир России. Спб., 1998. С. 325-326.
- (77) Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С. 115.
- (78) Гавлин М.Л. Российские Медици . С. 120-121.
- (79) Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С. 115.
- (80) Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С.116, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 73.
- (81) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 79, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 73.
- (82) Гавлин М.Л. Российские Медици . С. 121-122.
- (83) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 79, Петров Ю.А. Династия Рябушинских . р.29, Гавлин М.Л. Российские Медици . С. 118-119.
- (84) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 118.
- (85) Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. С. 180, Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С. 114.
- (86) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 122.
- (87) Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С. 119.
- (88) Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. С. 179.
- (89) Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 79.
- (90) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 44.
- (91) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 120.
- (92) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 38.
- (93) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 48. Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 122-123.
- (94) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 127.
- (95) 富岡庄一『ロシア経済史研究』、49頁。
- (96) Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 91, Хорькова Е.П. История предпринимательства и меценатства . С. 393.
- (97) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 136-137, Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. С. 180.
- (98) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 45.
- (99) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 139.
- (100) Там же . С. 138, Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 47.
- (101) Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 92.
- (102) 富岡庄一『ロシア経済史研究』、46頁。
- (103) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С. 51, Петров Ю.А. Павел Павлович Рябушинский . С. 120, Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 122.
- (104) Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 81.
- (105) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 112-115.
- (106) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 115-116, Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. С. 177, Калинин В.Д. Из истории предпринимательства . С. 74.
- (107) Торговое и промышленное дело Рябушинских . С. 75, Гавлин М.Л. Российские Медици . С. 118-119, Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы конец 19 в. - 1914. С. 178.

- (108) Торговое и промышленное дело
Рябушинских . С. 76.
- (109) Там же . С. 76, Калинин В.Д. Из истории
предпринимательства . С. 75, Петров Ю.А.
Династия Рябушинских . р. 37.
- (110) Гавлин М.Л. Российские Медичи . С. 118-
119.
- (111) Ананьич Б.В. Банкирские дома . С. 120.
- (112) Петров Ю.А. Коммерческие банки Москвы
конец 19 в . - 1914 . С. 182.
- (113) Петров Ю.А. Династия Рябушинских . С.
50.
- (114) Гавлин М.Л. Российские Медичи . С. 103.